

# サケ（シロザケ） 日本系

(Chum salmon *Oncorhynchus keta*)



## 管理・関係機関

北太平洋溯河性魚類委員会 (NPAFC)、日ロ漁業合同委員会

## 最近の動き

2021年漁期(8月～翌年2月末)の沿岸におけるサケ漁獲数は1,708万尾、河川捕獲数(人工ふ化放流のための親魚捕獲)は219万尾であり、両者を合わせた来遊数は2020年漁期の96%となる1,926万尾(速報値)であった。2021年漁期の来遊数は、1989年(平成元年)以降では最も低かった。2021年漁期の来遊数を地域別にみると、北海道では前年比102%、本州太平洋では前年比28%、本州日本海では前年比45%となり、本州で著しく減少した。

2022年漁期(10月31日現在)については、全国 come 遊数は3,124万尾(対前年同期比174%)となった。このように前年を大きく上回る come 遊数となったものの、種卵確保不足の懸念がある地域もあることから、北海道の各地で定置網の操業開始時期の延期等の自主漁獲規制が実施され、本州太平洋では定置網で獲れた親魚から採卵を行っている。

## 利用・用途

サケは生鮮・冷凍食材として利用されるほか、毎年、決まった季節に沿岸や川で大量に獲れるため、昔から燻製、塩蔵、乾物、缶詰、練製品等、様々な加工・保存方法が発達してきた。塩蔵品としては、山漬け、新巻、塩引鮭、定塩フィレ等があり、魚卵はすじこやいくら、腎臓はめふん(塩辛)、心臓はとんびことして加工される。乾物には鮭節、トバ等がある。その他の加工品として、お茶漬の具材として使われるサケフレーク、昆布巻、魚肉を米や麴で漬け込んだ飯寿司、塩蔵した魚介類を長期間熟成させた魚醤油等がある。サケの皮は、かつて北方先住民族であるアイヌが衣装や靴として加工していたが、現在ではコラーゲン抽出の原材料として注目されている。また精巢(白子)は、食材として消費されるだけでなく、核酸や塩基性タンパク質(ヒストンやプロタミン)を取り出して健康補助食品や機能性素材として利用される。

## 漁業の概要

サケ漁業の歴史は古く、縄文時代の遺跡からはエリと呼ばれる川を遮ってサケを獲る漁労施設の痕跡が、東日本各地の貝塚からはサケの骨が見つかった(Shida *et al.* 2009)。江戸時代中期(1800年頃)までのサケ漁業は、もっぱら河川内(河口周辺)で行われ、漁具としてヤナ、ウライ、鉤、ヤス、テンカラ釣り、四つ手網、流し網、投網、ひき網等が使われた。江戸末期になるとひき網のほか建網も使われるようになり、サケ漁業は河川から沿岸へと発展していった(秋庭 1988、小林 2009)。1869年に始まった北洋さけ・ます漁業については、「59. サケ・マス類の漁業と資源調査(総説)」を参照されたい。

江戸時代から現在にかけて、日本沿岸及び河川(ただし、1952年以降河川漁獲禁止)において秋から冬に行われるサケ漁業は、産卵のため母川を目指して回帰した日本系サケを対象としている。沿岸のサケは定置網、固定式刺網、磯建網、はえ縄等で、河川のサケはウライ、捕魚車、ひき網等で漁獲される。明治初期からの漁獲データが残る北海道についてみると、1870年から1893年頃までは漁獲数が1,000万尾を超える年がある等、年500万～700万尾ほどの漁獲があったが、それ以降1970年頃までの80年間あまりは年300万尾程度の水準が続いた(小林 2009)。日本で初めて人工ふ化放流が行われたのは1876年の茨城県那珂川であり、翌年には北海道でもサケの人工ふ化放流試験が実施された。その後、北海道では1888年に官営の千歳中央ふ化場が建設されると、民間のサケふ化場が次々と建設され、サケの資源維持は河川内サケ漁業を規制する産卵保護から人工ふ化放流へと転換していった。しかし、当時の民間ふ化場は経営が非常に厳しく、捕獲したサケ親魚の売却金が唯一の収入源であった(秋庭 1988)。そのため、河川遡上量の減少がふ化場の経営悪化につながり、さらに捕獲親魚の売却で放流種苗としての種卵の確保が困難になるという悪循環が生じ、サケ資源は長期間低迷した。民間ふ化場の経営の行き詰まりから、1934年に北海道のほとんど全ての民間ふ化場は官営となり、北海道のサケ人工ふ化放流は官営事業として

実施されることになった。しかし、当時のふ化放流技術は未熟だったこともあり、その後も資源は回復しなかった。第二次世界大戦後、1952年に水産資源保護法が施行されると、河川でのサケ採捕は人工ふ化放流のための親魚捕獲を除き原則禁止となり、北海道のふ化場は国立ふ化場が主体となり、また本州の民間ふ化場にも補助金が支出される等、国の積極的な支援の下、ふ化放流事業が実施される体制となった。その後、試験研究に基づいたふ化放流手法の実践及び1976/1977年のレジームシフト以降に海洋環境が好転したこともあり、1970年代半ば以降、日本系サケの漁獲量は飛躍的に増加し、1996年には史上最高となる26.6万トンを記録した。2021年の日本沿岸での漁獲量(春から夏季の日本200海里水域における流し網等の漁獲量を含む)は5.5万トンであり(Miyauchi and Sotoyama 2022)、最近10年間(2012~2021年)の漁獲量5.5万~15.6万トンの中では最低値となった(図1)(NPAFC Catch Statistics ウェブページ)。

### 生物学的特性

日本系サケは秋から冬にかけて河川を遡上し、河川の湧水域等の通水性の良い河床の砂礫を掘って産卵する。受精卵の発生速度は水温によって異なり、水温8℃では約60日でふ化する。ふ化した仔魚は、日光の遮断された砂礫中にとどまり、卵黄嚢を吸収しながら安静を保って成長する。卵黄嚢は水温8℃では約60日で吸収され、卵黄嚢の吸収がほぼ終わった個体は砂礫中から浮上して河川内で摂餌を開始する。摂餌を始めた稚魚は、河川を流下する水生昆虫や陸生昆虫を無選択に摂餌しつつ、多くの個体は活発な降海行動を示す(帰山 1986)。

一方、ふ化場で人工受精された受精卵は、第一卵割が始まる頃から発眼期まで、振動等の衝撃に極めて弱いため、安静を保って管理される。発眼期を迎えて、比較的衝撃に強い時期になると(水温8℃で受精後40~45日)、健全な受精卵と死卵を区別する検卵作業が行われる。サケの主要な標識方法として、耳石にバーコード状の輪紋を施す耳石温度標識(図2)があり、NPAFC 科学調査統計委員会における標識パターンの調整の下、北太平洋の各沿岸国で導入されている(NPAFC Working Group on salmon Marking ウェブページ)。この標識は、検卵後の発眼期からふ化までの間に、卵の飼育水温を人為的に制御することで作り出される。検卵や標識作業の終わった発眼卵は、

小石や人工基質を敷き詰めた養魚池または浮上槽と呼ばれる孵化器に収容され、ふ化から仔魚期を過ごす。ふ化した仔魚は日光を嫌うため、卵黄嚢を吸収し終わって浮上するまで、遮光した環境で管理される。浮上したサケ稚魚は、人工配合飼料で尾叉長50mm前後まで飼育されたのち、主に3~5月に河川へ放流される。

河川に放流されたサケ稚魚の大部分は、数日から10日前後で速やかに降海する(眞山ほか 1983)。降海したサケ稚魚は、塩分が低く波浪の影響を受けにくい河口域や沿岸域に群泳し、橈脚類、カニ類幼生、陸生昆虫等を摂餌しながら成長する(入江 1990)。尾叉長が70~80mmほどに成長すると遊泳能力が向上し、端脚類等のより大型の動物プランクトンや仔稚魚を摂餌できるようになる(帰山 1986)。この頃になると広域探索型の摂餌方法をとるようになり(帰山 1986)、主に距岸20~30km以内の沿岸域を北上移動し、7月末頃までに日本沿岸域を離岸する(入江 1990)(図3)。

日本沿岸域を離岸したサケ幼魚は、夏から秋にかけてオホ

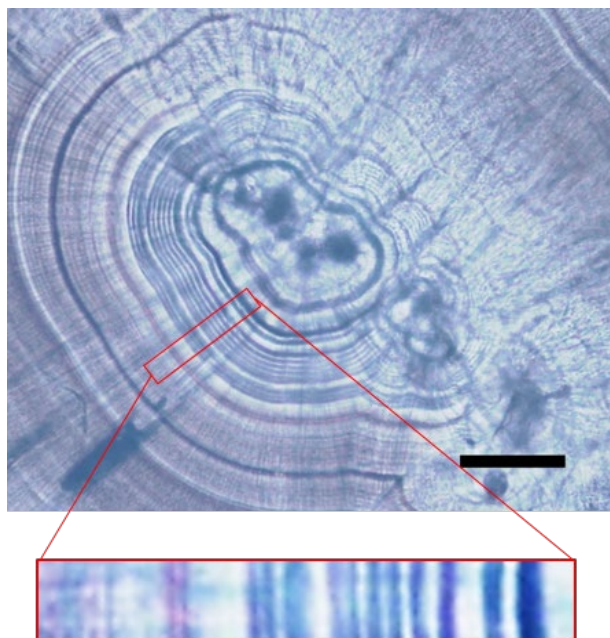


図2. サケの耳石温度標識

受精卵の発眼期からふ化までの期間に飼育水温を人為的に制御してバーコード状の輪紋を施標する。水温を下(上)げれば暗い(明るい)リングが形成される。写真右下のバーは50µmを示す。

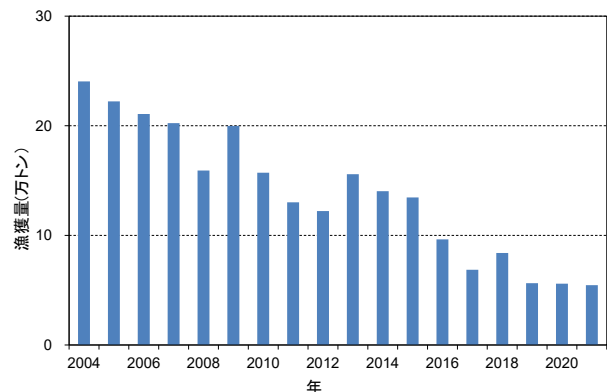


図1. 日本沿岸におけるサケの漁獲量 (NPAFC Catch Statistics ウェブページ、Miyauchi and Sotoyama 2022)

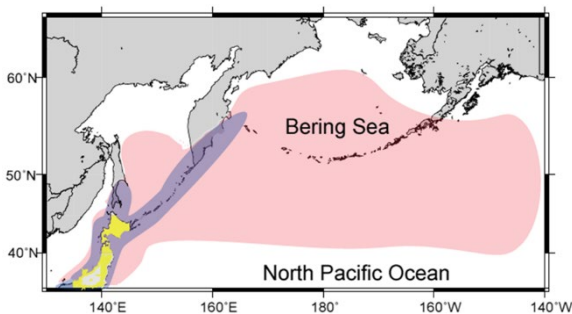


図3. 日本系サケの分布(黄色:産卵地域、赤色:海洋分布)及び漁場と想定される海域(青色)(浦和(2000)の図6とWatanabe(2017)の図1を改変)

ーツク海に分布し（浦和 2000、Mayama and Ishida 2003、Urawa *et al.* 2004）（図4）、端脚類、橈脚類やオキアミ類を主体とした動物プランクトンを摂餌しながら（関 未発表データ）、短期間で尾叉長 200~280 mm に成長する。オホーツク海沖で採捕されたサケ幼魚の降海後 30 日間の成長率は、北海道東太平洋沿岸で採捕された幼稚魚のものよりも高く偏ることが報告されている（Honda *et al.* 2019）。オホーツク海におけるサケ幼魚は、8 月には海水表面水温（SST）が 10℃を超える海域にも分布するが、9 月以降になると SST が 5~10℃の海域に分布が集中するようになり、オホーツク海の SST が 5℃以下に低下する 11 月にはオホーツク海から北西北太平洋へと南下する（Mayama and Ishida 2003）。その後、日本系サケは北西北太平洋の SST が 4~8℃の海域で最初の越冬を行う（Nagasawa 2000、浦和 2000）。

北西北太平洋で越冬した日本系サケ若齢魚（海洋年齢 1 歳）は 6 月になると北上し、アリューシャン列島から中部ベーリング海の内海盆付近にかけて広く分布するようになる（Urawa *et al.* 2009）（図5）。なお、海洋年齢とは、海洋生活期において越冬した回数のことを意味する。そして、クラゲ類、翼足類、オキアミ類、端脚類等を摂餌し（Davis *et al.* 2000）、初秋（9

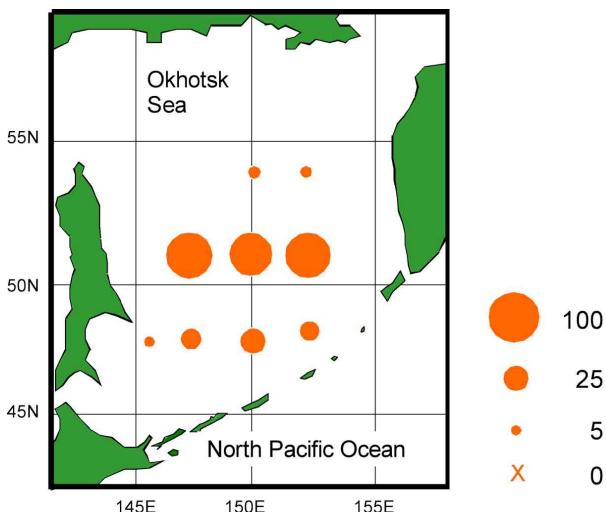


図4. 2002年10月における日本系サケ幼魚のオホーツク海における分布

遺伝的系群識別により推定された日本系サケの CPUE（トロール網 1 時間曳きあたりの採集個体数）を示した。（Urawa *et al.* (2004) を基に作成）

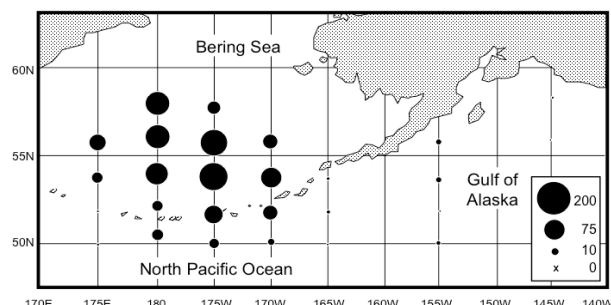


図5. 2003年8~9月における日本系サケ未成魚の海洋分布

遺伝的系群識別により推定された日本系サケの CPUE（トロール網 1 時間曳きあたりの採集個体数）を示した。日本系サケは大部分がベーリング海に分布する。（Urawa *et al.* 2009）

月）頃には尾叉長 360~390 mm 程度に成長する。7 月における未成熟魚の海洋年齢別の平均尾叉長を図6に示す（Ishida *et al.* 1998）。水温が低下する 11 月頃までに、日本系サケ若齢魚はベーリング海を離脱し、アラスカ湾の水温が 4~7℃の海域で 2 度目の越冬を行う。その後、日本系サケ未成魚は索餌海域（ベーリング海）と越冬海域（アラスカ湾）の間を季節的に移動し、成熟したサケ成魚は主にベーリング海を経由して産卵のため母川へ回帰する（浦和 2000）。過去の最大体長の個体は、尾叉長 108 cm、体重 11.5 kg を記録している。

日本系サケは成熟に 2~8 年を用し、通常 4 年魚（海洋年齢 3 歳）として母川に回帰するものが最も多い。2012 年には北海道のオホーツク沿岸で 9 年魚のサケが漁獲されたこともある（宮腰 2014）。成熟年齢や成熟サイズには日本海や本州の河川群では 2~3 年魚といった若齢の成魚が比較的出現しやすい等、地域個体群ごと、河川群ごとに変異が存在する（斎藤ほか 2015）。成熟年齢と成熟サイズの決定には、河川群ごとの遺伝的差異のほかに、沖合海域での成長が影響している（Morita *et al.* 2005）。さらに、成魚の河川遡上時期や繁殖形質（卵数や卵径）にも、地域個体群及び河川群による地理的傾斜及びこの傾斜の時間的な変化が認められる（斎藤ほか 2015、Hasegawa *et al.* 2021a）。このように様々な形質に地域あるいは河川ごとの差異が存在するのは、サケが母川回帰性を有するために、各々の地域個体群あるいは河川群がそれぞれの河川や沿岸環境及びふ化放流に起因する人為選択に適応したためと考えられる。サケは一生に 1 度だけ産卵する 1 回繁殖の繁殖様式をとり、雌親魚は卵をいくつかの産卵床にわけて産卵し、雄は雌をめぐって雄間で攻撃行動をとる（Salo 1991）。繁殖活動を終えたサケは雌雄ともに全て死亡する。サケは、河川から海洋におよぶ全生活史にわたり、様々な動物に捕食される。産卵のため河川に遡上したサケ成魚は、ヒグマ等の陸上大型哺乳類に捕食される（Gende and Quinn 2004）。また、河川での卵・仔稚魚期には魚類（カジカ類、アメマスやサクラマス等のサケ科魚類、ウグイ等）、降海後の幼稚魚期には海鳥（ウトウ、ウミネコ等）や魚類（ウグイ、マルタ、アメマス、ヒラメ、ソウハチ、スズキ、クロソイ、アブラツノザメ、ホッケ、コマイ、カラフトマス、サクラマス等）、未成魚・成魚期には大型魚類（ネズミザメ、ミズウオダマシ等）や海産哺乳類（ゼニガタアザラシ、オットセイ類、カマイルカ等）に捕食される

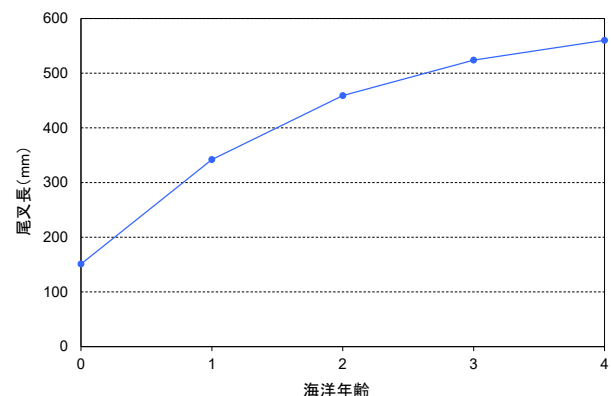


図6. 北太平洋におけるサケ未成魚の7月における平均尾叉長（Ishida *et al.* 1998）

(久保 1946、Fiscus 1980、河村 1980、Nagasawa 1998a、1998b、Nagasawa *et al.* 2002、宮腰ほか 2013、Okado *et al.* 2020)。また、体長が比較的小さい稚魚が河川や湾内でサケ科魚類に捕食される傾向がある (Hasegawa *et al.* 2021b)。

### 資源状態

サケ・マス類全体としては、1976/1977年のレジームシフト以降、北太平洋の漁獲量は増加し、1990年代に入っても比較的安定した高水準が続いている。2009年には史上最高の114万トンの漁獲量を記録したほか、2018年及び2021年にも100万トンを超える漁獲量が記録される等、北太平洋のサケ・マス類は高い資源水準にある (NPAFC 2021)。日本及びロシアのいくつかの地域では、放流手法の改善や海洋環境の好転により、ふ化場産サケの生残率が向上しており、そのことが2000年代までのアジア側における高い資源水準と関連していると考えられる (Irvine *et al.* 2012)。しかし、サケの漁獲量については、2000年代中盤以降、日本の漁獲量が減少してゆく一方で、ロシアの漁獲量は増加した。また2010年代中盤以降は世界的にもサケの漁獲量が減少傾向にあり、2021年は約17万トンと1980年代の漁獲水準まで落ち込んでいる (NPAFC 2021)。北太平洋に分布するサケ・マス類の分布・資源量をモニタリングするため、1952年から流し網を用いた米国等との国際共同調査が行われてきた。1990年代以降、NPAFC加盟国による海洋でのサケ・マス類の資源量調査では、表層トロール網が標準的な採集漁具として用いられるようになり、我が国でも2007年以降 (2007~2009年及び2011~2021年)、夏季ベーリング海において表層トロール網によるサケ・マス類の分布・資源量モニタリングを実施している (Honda *et al.* 2022)。表層トロール網で採集されたサケ未成魚については、海洋年齢別に平均CPUE (5ノット1時間曳網あたりの漁獲尾数、17調査定点の平均値) が推定されており、特に海洋年齢1歳 (尾叉長300~400mm) の平均CPUEが高いことが確認されている (Honda *et al.* 2022) (図7)。経年的には、2014~2015年の調査では、海洋年齢1歳の未成魚のCPUEが過去の調査の値に

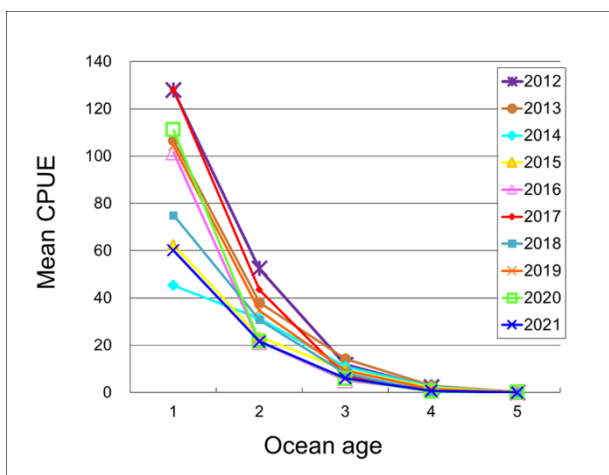


図7. 夏季ベーリング海におけるサケの年齢別 CPUE (トロール網1時間曳きあたりの採集個体数) (Honda *et al.* (2022) の図8を改変)  
年齢は海洋年齢1~5歳 (1+~5+) で示しており、回帰時の年齢では2~6年魚に相当する。

比べて約半分に減少し、2016~2020年では2018年を除き平年並みまたは平年以上の値で推移した。しかし、2021年は再び平年値を下回った。今後、モニタリングデータの蓄積が進み、同調査の漁獲物について遺伝的手法等による系群組成の推定が実施されることで、日本系サケの資源評価の精度向上、他国起源のサケ・マス類との種間関係及び生息状況の評価が進展するものと期待される。

我が国におけるサケの放流数は、1960年代から1970年代にかけて増加し、1980年代から2010年代までは18億~20億尾に維持されていた (図8)。1960年代からの増加は、第二次世界大戦後に再開された北洋さけ・ます漁業の操業条件の厳しさが増し、国内の資源増大を図る機運が高まったこと、さらに1962年から始まったサケの給餌飼育放流が放流後のサケの生残率を向上させ、沿岸や河川に回帰してくる来遊数が増加したこと等の理由による (小林 2009)。しかし、1970年代の半ば頃から、それまで増加の一途をたどっていた日本のサケ放流数に対して国外から他国のサケ・マス類の成長や生き残りに影響を及ぼすのではないかと懸念が示され、1980年以降、放流数は一定に維持されるようになり (小林 2009)、概ね18億~20億尾程度で推移した。その後、2011年の東日本大震災により、被災地域のふ化場被害とそれによる放流目標数の減少の影響を受け (小川・清水 2012)、放流数は16億~18億尾程度 (2012年から2019年) となり、さらに近年は種卵確保のための河川捕獲数も減少したため、2020年及び2021年放流数は、13.8億尾程度に留まっている。一方、サケの来遊数 (沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計) は、1960年代後半の約500万尾から1990年には6,000万尾を超えて10倍以上に増加した (図8)。このように来遊数が飛躍的に増加したのは、給餌・適期放流 (給餌して大型に育てたサケ稚魚を、沿岸域の水温が上昇して餌生物の生産が高くなった時期に放流すること) の実践 (Sakuramoto and Yamada 1980、関 2013) や、1976/1977年のレジームシフトに伴う海洋環境の好転が影響したと言われているが (たとえば Mayama 1985、Kaeriyama 1998)、北洋さけ・ます漁業の終焉や河川環境 (産卵環境) の改善による効果も指摘されている (Morita *et al.* 2006)。しかし、1990年代以降の来遊数は1,973万~8,879万尾と年変動が大きく、2004年から来遊数は漸減している。近年の研究では、1980年以降の北海道の来遊数変動を引き起こす回帰率の変動は、放流サ

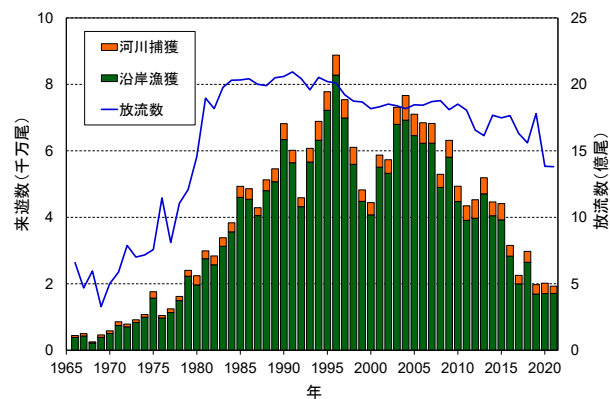


図8. サケの来遊数 (沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計値) と放流数 (1966~2021年)

イズ、稚魚期・幼魚期の海洋環境と成長の影響を受けていると言われている (Saito *et al.* 2011, Honda *et al.* 2021, Saito 2022)。2021年には来遊数が1,926万尾となり、1989年以降では最低値を記録した。2016年以降の来遊数は放流数がほぼ一定になった1980年代半ばにおける来遊数を大きく下回っており、さらに1970年まで遡ってみた場合、直近2021年の来遊数は、過去の最低値585万尾（1970年）と最高値8,879万尾（1996年）の範囲における下位3分の1を下回る。そのため、現在の資源水準は低位に位置すると判断した。また、近年5か年（2017～2021年）の資源動向は、来遊数が2018年にやや増加したもののそれ以外の年で低い水準が続いていることから、横ばい傾向と判断した。なお、2022年10月末時点の全国の来遊数は前年同期の174%となっており、2016年以降はじめて3,000万尾を超えて推移している。

1989年級群（1989年に回帰した親魚に由来し、翌1990年春に放流された年級群）以降の日本各地の回帰率を図9に示す。北海道では、1995年級群の回帰率が2%台まで大きく落ち込んだものの、1998年級群までは概ね3～4%ほどを維持していた。その後、1999年級では5%付近まで増加したが、以降は大きな隔年変動を示しながら徐々に低下し、2015年級群では0.93%と1989年級以降最低を記録した。本州太平洋では、1994年級群まで平均2.5%程だった回帰率が、1995年級群で約1%まで大きく落ち込み、それ以降2%前後でしばらく推移したが、2006年級群で再び約1%に減少し、震災年に放流された2010年級群では0.74%となった。2015年級群では0.10%と1989年級以降最低を記録し極めて低い水準となった。一方、本州日本海では、1999年級群まで平均0.3%だった回帰率は、2000～2005年級群まで平均0.7%に向上した。しかし、2006年級群以降では再び0.3～0.4%台に低下し、2008～2011年級群ではやや回復したが、2015年級群では0.12%に低下し1989年級以降最低を記録した。

サケ成魚の沿岸での平均目回り（漁獲尾数とその重量から求めた1尾当たりの平均体重）は、北海道、本州太平洋及び本州日本海の3地域で増減傾向が類似する（図10）。1989年から上昇傾向にあり、その後2002年及び2003年に最大値を記録した。その後、変動しながら減少する傾向が続いている。

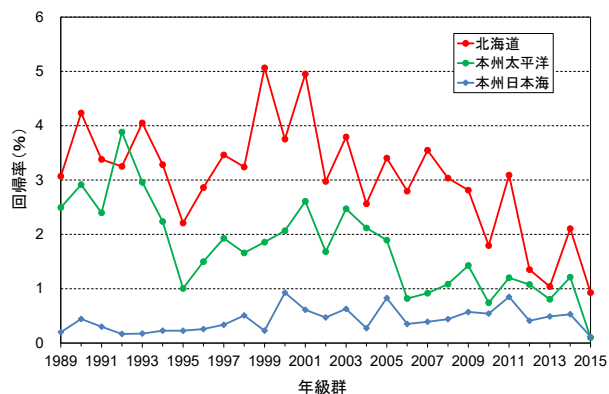


図9. 日本各地におけるサケの回帰率の推移（1989～2015年級群）  
回帰率とは、各年級群の2～6年魚の来遊数合計値をその年級群の放流数で除した割合（%）とする。

### 管理方策

日本系サケは北太平洋を広く回遊する溯河性魚類であり、国際資源管理の対象魚種となっている。溯河性魚類は公海上での商業漁獲が禁止されており、その系群が発生する母川が存在する国はその系群を利用する第一義的利益と責任を有することとされている。

日本系サケの放流数は1980年代初めからほぼ一定に維持されてきたため、放流数と来遊数の間には密度依存的な関係が観察されず、最大持続生産量とそれに必要な最適放流数は算出されていない。現在の日本系サケの来遊数は変動しながら漸減しており、2021年では1,926万尾（速報値）となり、1989年以降最低となった（図8）。2021年の来遊数と過去10年の平均来遊数（3,290万尾）との比は0.59であり、その来遊数は過去10年平均値よりも少なく、現在の資源水準は低位に相当する。以上のことから判断して、現在の資源水準を過去10年の平均来遊数程度に回復するための管理方策を講じることが望ましい。そのためには、ふ化場の施設数・規模の制約を考慮しつつ、産卵親魚量一定方策により管理し、近年の放流数である約18億尾を維持する必要がある。北海道では、種卵確保のため、連合海区漁業調整委員会が策定する「秋さけの親魚確保及び適正利用を図るための実施方針」に基づき、定置漁業の操業開始時期の延期といった自主規制が行われている（北海道ウェブページ）。本州太平洋では、定置網で獲られた親魚から採集した卵（海産卵）による種卵確保も対応策の一つとして実施されている。種卵が十分に確保できない場合には、沿岸漁業の漁獲率をわずかに削減することで目標とする親魚を確保できるという漁獲管理の有効性がシミュレーションにより示されている（Watanabe *et al.* 2015）。

近年回帰率が低下傾向であるため、種卵確保だけでなく、従来の放流手法を見直すことで回帰率を向上させることも課題となっている（不漁問題に関する検討会 2021）。十勝川に放流された耳石温度標識付き稚魚の成長履歴と放流手法の研究では、最適な放流時期・サイズは降海サイズと河口付近や回遊途上の海洋環境に依存し年変化することから、沿岸水温の予測が将来可能になれば放流手法の改変により回帰率向上の可能性があると報告されている（Saito 2022）。さらに、河口付近から沿岸域にかけての表面水温が短期間で急上昇した場合、回

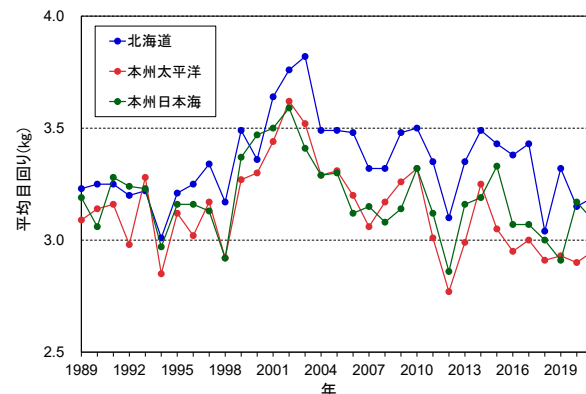


図10. 沿岸で漁獲されたサケの平均目回り（平均体重）の推移（1989～2021年）

帰率が低下する傾向が示されている (Saito 2022)。

その一方で、ふ化放流に加えて野生サケを考慮した資源管理も必要であると指摘されている (Miyakoshi *et al.* 2013, Kitada 2014, Morita 2014, 大熊ほか 2016, 森田 2020)。これまで日本に回帰するサケはその大部分がふ化放流事業に由来する放流魚であると考えられ (Kaeriyama 1999)、自然産卵由来のサケはほとんど存在しないとされてきた。しかし近年の研究から、サケの人工ふ化放流事業が盛んな北海道や本州日本海側の数多くの河川において、自然再生産するサケがまだ存在していることが確認された (Miyakoshi *et al.* 2012, Iida *et al.* 2018)。北海道で放流が行われている 8 河川では、河川捕獲数に占める自然再生産由来のサケの割合が河川や年によって約 30%を超えるとの推定もある (森田ほか 2013)。また、これまでに公表されている北太平洋サケ集団の遺伝分析データが再検討された結果、日本系サケはふ化放流に起因する人為的選択圧を受けており、生物学的な能力 (有酸素運動や持続力等の効率) が低下している可能性がある旨と指摘されている (Kitada and Kishino 2021)。現在、野生サケに対する様々な取り組みが各地で行われている。例えば、北海道の太平洋西部に位置する日高管内の河川ではウライを撤去することで自然産卵が促され (森田 2020)、オホーツク海の網走管内では、放流が行われていない 6 河川で繁殖保護のため河口付近におけるサケ・マス採捕が 2022 年の来遊時期に禁止された (網走海区調整委員会ウェブページ)。また、根室管内の標津町近隣河川及び石狩管内の豊平川では自然産卵親魚数及び生態が継続的に調査されている (有賀・鈴木 2009, 大熊ほか 2016)。

2022 年度漁期の来遊数を過去 5 年 (2017~2021 年) の平均来遊数の 2,229 万尾と仮定すると、採卵に必要な河川捕獲数 (親魚数) は 471 万尾と見積ることができるので、持続漁獲数 (来遊数のうち必要な親魚数を確保した上で、漁業として利用できる残りの数) は両者の差である 1,758 万尾となる。これに過去 5 年の全国平均目回りである 3.19 kg をかけると、重量ベースでは 5.6 万トンと計算される。

現在、我が国のサケの増殖計画策定や主要漁業である定置網の漁獲管理等の資源管理措置は、道県あるいはその中の地域単位で実施されている。この資源管理の基礎となる地域単位ごとの来遊数は、沿岸漁獲魚の起源が当該地域の河川であるという前提で計算されている。しかし、これまでの親魚標識放流や沿岸漁獲魚における耳石温度標識の確認から、沿岸漁獲魚には当該地域以外から放流された魚も含まれることが知られている (高橋 2009, Saito *et al.* 2020)。今後、地域単位の来遊数をより正しく評価するためには、漁獲された魚の起源推定が必要であり、その推定に必要な生物学的知見を蓄積していくことが重要である。また、母川国である我が国は適正な資源管理を実施することが肝要である。2010 年代中盤以降、北太平洋におけるサケ・マス類の資源量は歴史的にも高水準であり、ロシア系及び米国カラフトマス・ベニザケが増大している。一方、一方、日本のサケ及び世界のサケ漁獲量は減少していることから、北太平洋のサケ・マス類の資源動向に加え他国起源のサケ・マス類が混生する北太平洋及びベーリング海における生物生産についても注視していく必要がある。

## 執筆者

北西太平洋ユニット

さけ・ますサブユニット

水産資源研究所 さけます部門 資源生態部

渡邊 久爾・水本 寛基・本多 健太郎・佐藤 俊平

## 参考文献

- 網走海区調整委員会 [https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/fs/6/5/5/9/1/3/6/\\_/リーフレット 4.pdf](https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/fs/6/5/5/9/1/3/6/_/リーフレット 4.pdf) (2022 年 11 月 20 日)
- 秋庭鉄之. 1988. 鮭の文化誌. 北海道新聞社, 札幌. 209 pp.
- 有賀 望・鈴木俊哉. 2009. 豊平川のサケ産卵床における環境条件と浮上までの生残率. SALMON 情報, 3: 3-5.
- Davis, N.D., Aydin, K.Y., and Ishida, Y. 2000. Diel catches and food habits of sockeye, pink, and chum salmon in the Central Bering Sea in summer. N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull., 2: 99-109.
- Fiscus, C.H. 1980. Marine mammal-salmonid interactions: A review. In McNeil, W.J. and Himsforth, D.C. (eds.), Salmonid ecosystems of the North Pacific. Oregon State University Press, Corvallis, OR, USA. 121-132 pp.
- 不漁問題に関する検討会. 2021. 不漁問題に関する検討会とりまとめ～中長期的なリスクに対して漁業を持続するための今後の施策の方向性について～. 水産庁, 東京. 31 pp. [https://www.jfa.maff.go.jp/j/study/attach/pdf/furyou\\_kenn tokai-19.pdf](https://www.jfa.maff.go.jp/j/study/attach/pdf/furyou_kenn tokai-19.pdf) (2022 年 11 月 20 日)
- Gende, S.M., and Quinn, T.P. 2004. The relative importance of prey density and social dominance in determining energy intake by bears feeding on Pacific salmon. Can. J. Zool., 82: 75-85.
- Hasegawa, K., Okamoto, Y., and Morita, K. 2021a. Temporal trends in geographic clines of chum salmon reproductive traits associated with global warming and hatchery programmes. Ecol. Solut. Evid., 2: 1-12.
- Hasegawa, K., Honda, K., Yoshiyama, T., Suzuki, K., and Fukui, S. 2021b. Small biased body size of salmon fry preyed upon by piscivorous fish in riverine and marine habitats. Can. J. Fish. Aquat. Sci., 78: 631-638.
- 北海道 [https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/6/8/9/4/8/3/5/\\_/北海道資源管理指針\(R4.9%20一部変更\).pdf](https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/6/8/9/4/8/3/5/_/北海道資源管理指針(R4.9%20一部変更).pdf) (2022 年 11 月 20 日)
- Honda, K., Kawakami, T., Saito, T., and Urawa, S. 2019. First report of growth rate of juvenile chum salmon *Oncorhynchus keta* captured in the Sea of Okhotsk offshore. Ichthyol. Res., 66: 155-159.
- Honda, K., Sato, T., Kuroda, H., and Saito, T. 2021. Initial growth characteristics of poor-return stocks of chum salmon *Oncorhynchus keta* originating from the Okhotsk and Nemuro regions in Hokkaido on the basis of scale analysis. Fish. Sci., 87: 653-663
- Honda, K., Sato, T., Mizumoto, H., Yatsuya, M., Miyauchi, Y., Abe,

- T., and Sato, S. 2022. The summer 2021 Japanese salmon research cruise of the R/V Hokko maru. NPAFC Doc. 2030. 17pp.
- Iida, M., Yoshino, K., and Katayama, S. 2018. Current status of natural spawning of chum salmon *Oncorhynchus keta* in rivers with or without hatchery stocking on the Japan Sea side of northern Honshu, Japan. *Fish. Sci.*, 84: 453-459.
- 入江隆彦. 1990. 海洋生活初期のサケ稚魚の回遊に関する生態学的調査. 西海区水産研究所研究報告, 68: 1-142.
- Irvine, J.R., Tompkins, A., Saito, T., Seong, K.B., Kim, J.K., Klovach, N., Bartlett, H., and Volk, E. 2012. Pacific Salmon Status and Abundance Trends - 2012 Update. NPAFC Doc. 1422. 89 pp.
- Ishida, Y., Ito, S., Ueno, Y., and Sakai, J. 1998. Seasonal growth patterns of Pacific salmon (*Oncorhynchus* spp.) in offshore waters of the North Pacific Ocean. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 1: 66-80.
- Ishida, Y., Yamada, A., Adachi, H., Yagisawa, I., Tadokoro, K., and Geiger, H.J. 2009. Salmon distribution in northern Japan during the Jomon Period, 2,000-8,000 years ago, and its implications for future global warming. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 5: 287-292.
- 帰山雅秀. 1986. サケ *Oncorhynchus keta* (Walbaum) の初期生活に関する生態学的研究. 北海道さけ・ますふ化場研究報告, 40: 31-92.
- Kaeriyama, M. 1998. Dynamics of a chum salmon, *Oncorhynchus keta*, population released from Hokkaido in Japan. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 1: 90-102.
- Kaeriyama, M. 1999. Hatchery programmes and stock management of salmonid populations in Japan. In Howell BR, Moksness E, Svåsand T. (eds.), *Stock Enhancement and Sea Ranching*, 153-167. Fishing News Books, Malden.
- 河村 博. 1980. サケ・マス生産河川におけるハナカジカによるサケ稚魚の捕食減耗について. 北海道立水産孵化場研究報告, 35: 53-62.
- Kitada, S. 2014. Japanese chum salmon stock enhancement: current perspective and future challenges. *Fish. Sci.*, 80: 237-249.
- Kitada, S., and Kishino, H. 2021. Population structure of chum salmon and selection on the markers collected for stock identification. *Ecol. Evol.*, 11: 13972-13985. Doi: 10.1002/ece3.8102
- 小林哲夫. 2009. 日本サケ・マス増殖史. 北海道大学出版会, 札幌. 310 pp.
- 久保達郎. 1946. 各種河川魚の鮭鱒稚魚食害に就て. 北海道さけ・ますふ化場研究報告, 1: 51-55.
- Mayama, H. 1985. Technical innovations in chum salmon enhancement with special reference to fry condition and timing of release. In Sindermann, C.J. (ed.), *Proceedings of the eleventh U.S.-Japan meeting on aquaculture, salmon enhancement*, Tokyo, Japan, October 19-20, 1982. U.S. Dep. Commer., NOAA Tech. Rep. NMFS 27. 83-86 pp.
- 眞山紘・関 二郎・清水幾太郎. 1983. 石狩川産サケの生態調査—II, 1980年及び1981年春放流稚魚の降海移動と沿岸帯での分布回遊. 北海道さけ・ますふ化場研究報告, 37: 1-22.
- Mayama, H., and Ishida, Y. 2003. Japanese studies on the early ocean life of juvenile salmon. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 3: 41-67.
- 宮腰靖之. 2014. 北海道東部沿岸で漁獲された9歳魚のサケ(短報). 北海道水産試験場研究報告, 85: 33-35.
- Miyakoshi, Y., Urabe, H., Saneyoshi, H., Aoyama, T., Sakamoto, H., Ando, D., Kasugai, K., Mishima, Y., Takada, M., and Nagata, M. 2012. The occurrence and run timing of naturally spawning chum salmon in northern Japan. *Environ. Biol. Fish.*, 94: 197-206.
- 宮腰靖之・永田光博・安藤大成・藤原 真・青山智哉. 2013. 北海道東部網走沿岸におけるサケおよびカラフトマス稚魚の魚類捕食者(短報). 北海道水産試験場研究報告, 83: 41-44.
- Miyakoshi, Y., Nagata, M., Kitada, S., and Kaeriyama, M. 2013. Historical and current hatchery programs and management of chum salmon in Hokkaido, northern Japan. *Rev. Fish. Sci.*, 21: 469-479.
- Miyauchi, Y., and Sotoyama, Y. 2022. Preliminary Statistics for 2021 Commercial Salmon Catches in Japan. NPAFC Doc.2026. 2 pp.  
<https://npafc.org/wp-content/uploads/Public-Documents/2022/2026Japan.pdf> (2022年11月20日)
- Morita, K. 2014. Japanese wild salmon research: toward a reconciliation between hatchery and wild salmon management. *NPAFC Newsletter*, No. 35: 4-14.
- 森田健太郎. 2020. サケを食べながら守り続けるために. 日本水産学会誌, 86: 180-183.
- Morita, K., Morita, S.H., Fukuwaka, M., and Matsuda, H. 2005. Rule of age and size at maturity of chum salmon (*Oncorhynchus keta*): implications of recent trends among *Oncorhynchus* spp. *Can J. Fish. Aquat. Sci.*, 62: 2752-2759.
- Morita, K., Saito, T., Miyakoshi, Y., Fukuwaka, M., Nagasawa, T., and Kaeriyama, M. 2006. A review of Pacific salmon hatchery programmes on Hokkaido Island, Japan. *ICES J. Mar. Sci.*, 63: 1353-1363.
- 森田健太郎・高橋 悟・大熊一正・永沢 亨. 2013. 人工ふ化放流河川におけるサケ野生魚の割合推定. 日本水産学会誌, 79: 206-213.
- Nagasawa, K. 1998a. Predation by salmon shark (*Lamna ditropis*) on Pacific salmon (*Oncorhynchus* spp.) in the North Pacific Ocean. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 1: 419-433.
- Nagasawa, K. 1998b. Fish and seabird predation on juvenile chum salmon (*Oncorhynchus keta*) in Japanese coastal waters, and an evaluation of the impact. *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 1: 480-495.
- Nagasawa, K. 2000. Winter zooplankton biomass in the subarctic North Pacific, with a discussion on the overwintering survival strategy of Pacific salmon (*Oncorhynchus* spp.). *N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull.*, 2: 21-32.

Nagasawa, K., Azumaya, T., and Ishida, Y. 2002. Impact of predation by salmon sharks (*Lamna ditropis*) and duggertooth (*Anotopterus nikparini*) on Pacific salmon (*Oncorhynchus* spp.) stocks in the North Pacific Ocean. N. Pac. Anadr. Fish Comm. Tech. Rep., 4: 51-52.

NPAFC. 2021. Annual Report, 2021. 172 pp.

NPAFC Catch Statistics. <https://npafc.org/statistics> (2022年11月2日)

NPAFC Working Group on Salmon Marking. <https://npafc.org/otolith-marking/> (2022年11月20日)

小川 元・清水勇一. 2012. 東日本大震災からの岩手県さけ増殖事業の復興と資源回復の課題. 日本水産学会誌, 78: 1040-1043.

大熊一正・長谷川功・佐藤俊平・岸大弼・市村正樹・飯田真也・森田健太郎. 2016. 野生魚を活用した持続可能なさけます漁業と増殖事業. SALMON 情報, 10: 30-37.

Okado, J., Koshino, Y., Kudo, H., and Watanuki, Y. 2020. Consumption of juvenile chum salmon by a seabird species during early sea life. Fish. Res., 222: 1-7. Doi: 10.1016/j.fishres.2019.105415

Saito, T., Kaga, T., Hasegawa, E., and Nagasawa, K. 2011. Effects of juvenile size at release and early marine growth on adult return rates for Hokkaido chum salmon (*Oncorhynchus keta*) in relation to sea surface temperature. Fish. Oceanogr., 20: 278-293.

斎藤寿彦・岡本康孝・佐々木 系. 2015. 日本系サケの生物学的特性. 水産総合研究センター研究報告, 39: 85-120.

Saito, T., Honda, K., Sasaki, K., Watanabe, K., Suzuki, K., Hirabayashi, Y., Kogarumai, S., Sato, T., Takahashi, F., and Sato, S. 2020. Stock composition of adult chum salmon *Oncorhynchus keta* caught in a setnet fishery estimated using genetic identification, scale patterns, and otolith thermal marking. Fish. Sci., 86: 271-286.

Saito, T. 2022. Optimum timing and size at release of chum salmon: Improving survival by modifying hatchery practices. Fish. Oceanogr., 31: 416-428. Doi: 10.1111/fog.12585

Sakuramoto, K., and Yamada, S. 1980. A study on the planting effect of salmon-II On the effect of planting and feeding. Bull. Jpn. Soci. Sci. Fish., 46: 663-669.

Saló, E.O. 1991. Life history of chum salmon (*Oncorhynchus keta*). In Groot, C. and Margolis, L. (eds.), Pacific Salmon Life Histories. UBC Press, Vancouver. 231-309 pp.

関 二郎. 2013. さけます類の人工孵化放流に関する技術小史(放流編). 水産技術, 6: 69-82.

高橋史久. 2009. これまでの耳石温度標識魚から得られた知見. SALMON 情報, 3: 6-7.

浦和茂彦. 2000. 日本系サケの回遊経路と今後の研究課題. さ

け・ます資源管理センターニュース, 5: 3-9.

Urawa, S., Seki, J., Kawana, M., Saito, T., Crane, P.A., Seeb, L., Gorbatenko, K., and Fukuwaka, M. 2004. Juvenile chum salmon in the Okhotsk Sea: their origins estimated by genetic and otolith marks. NPAFC Tech. Rep., 5: 87-88.

Urawa, S., Sato, S., Crane, P.A., Agler, B., Josephson, R., and Azumaya, T. 2009. Stock-specific ocean distribution and migration of chum salmon in the Bering Sea and North Pacific Ocean. N. Pac. Anadr. Fish Comm. Bull., 5:131-146.

Watanabe, K., Sasaki, K., Saito, T., and Ogawa, G. 2015. Scenario analysis of the effects of the Great East Japan Earthquake on the chum salmon population-enhancement system. Fish. Sci., 81: 803-814.

Watanabe, K. 2017. Multi-timescale interactions between pink and chum salmon catch per unit effort in the Bering Sea. Fish. Oceanogr., 26: 498-506.

サケ(シロザケ)(日本系)の資源の現況(要約表)

資源水準	低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量(最近5年間)	17万~27万トン 最近(2021)年: 17万トン 平均: 22万トン(2017~2021年)
我が国の漁獲量(最近5年間)	5.5万~8.4万トン 最近(2021)年: 5.5万トン 平均: 6.4万トン(2017~2021年)
管理目標	資源水準の回復 目標値: 過去10年の平均来遊数3,290万尾
資源評価の方法	来遊数(沿岸漁獲数及び河川捕獲数の合計)により水準と動向を評価
資源の状態	2021年の来遊数/目標値: 0.59 (目標値: 過去10年の平均来遊数3,290万尾)
管理措置	・持続的漁獲量: 1,758万尾(5.6万トン) ・稚魚放流数: 18億尾 ・幼魚・未成魚・成魚期排他的経済水域(EEZ)外、成魚期河川内禁漁(成魚期日本EEZ内のみ漁獲可能)
管理機関・関係機関	NPAFC、日ロ漁業合同委員会
最近の資源評価年	2022年
次回の資源評価年	2023年